

佐賀北山方言の仮定条件法

神 部 宏 泰

一

ここにとりあげる北山方言とは、佐賀市の北方、背振連山の麓に位置する、富士村北山地区の生活語を指している。北山地区は、主として農林業を営む、人口約四千人の村落である。

筆者は、昨年（一九六五年）夏、「総合研究」の一環として、この北山を訪ね、約二週間滞在して、当地の生活のことばを観察した。

本稿では、その北山方言の、主として仮定条件法について、いくらかのことを述べてみたい。

二

国語表現にあって、仮定条件は、用言の、いわゆる仮定形に、接続助詞「ば」の接した形で表わされるのが一般である。九州も、概してこの傾向に立つ。が、当、北山方言にあっては、やや様相を異にしている、用言に、「なれば」の機能する条件法が著しい。

○イクナレバ、（行けば、）
○キクナレバ、（聞けば、）

さて、「なれば」の機能する条件法にあっては、右の文例のような「くナレバ」のほかに、「くナレ（ー）」「くナイバ」「くナイ」の形ででもおこなわれるが、なかでも「くナイバ」の活動がきわだたい。

○ノスナイバ、モツテイタツテクンサイ。（持てれば、持って行って下さい。）

○シンテオモナイバ、デキンコターナカクサイ。（死ぬと思えばできないことはないさ。）

このような「くナイバ」の、高い出現頻度を見れば、「なれば」一派のなかにあっても、まず、安定を得ている様子が明らかである。

ところで、右の「くナイバ」に対して、「くナレバ」のように、「レ」音が、いわば本来音のままに存する場合は、「くナレバ」よりも、むしろ、次の文例のように、「くナレ（ー）」と、「ば」陰在の形でおこなわれるのが普通である。

○アンナレー カシテ クンサイ。(あれば貸して下さ
い。)

右の、出現頻度の点で相即的な、「ンナイバ」と「ン
レ」の対応は、興味深い。すなわち、「ば」は、「ン
レ」と、「ンナイ」と、本来の音相を保持している場合は陰在しや
すく、「ンナイ」と、転訛の音相をとる場合は、陰在し
にくいという傾向を示している。この事實は、一方から見
れば、条件接続の機能保持をめざす、話者の表現心意を物
語るとも解されよう。

三

「ば」は、また、特定の助動詞に接続して、仮定の条件
法に立つことがある。その場合も、「ば」の、顕在、陰在
の現象が、先に、「なれば」について検討したとおりに観
察されて、注目される。

否定の助動詞にかかわる場合を見れば、次下のようにな
る。

○ハヨー ガッコーサン イカネー オスーナツ ジャ
ー。

(早く学校へ行かなければおそくなるぞ。)

○モー ソロソロ ユルイ アケネー ヒョーシテ オ
ラレン バイ。ハ上昇調子。(もうそろそろいろいろを
開けなければ寒くて居られないよ。)

右のように、「ねば」にあって、「ね」が本来音であれ
ば、「ば」は陰在しやすいためである。(「ンネバ」も存
立はするが、かなり特殊である。)一方、その「ね」が転
訛音「ン」をとれば、「ば」は、「ンバ」のように顕在
する。

○カズレテ ミンバ ワカラン。(かぞえてみなければ
わからない。)

○ハヨー オキランバ オクルイヨ。ハ上昇調子
(早く起きなければおくれるよ。)

以上のように、「ンネー」「ンバ」両形は、興味ある
併存の状況を示している。使用の実際にあっても、性別年
令による、著しい差は認められない。ただ、少年層などで
は、別に「イカニャー」(行かなければ、)などの「ン
ニャー」が、いくらか観察される。

なお、完了の「た」についても、右と同様の過程を経た
とみられる「ンタレー」「ンタイバ」両形が併存する。

○ユータレー、(言ったら、)
○キヤータイバ、(書いたら、)

最後に、次の点に注意しておきたい。以上の、「否定」
および「完了」にかかわる条件法は、まれに、前項で述べ
た、「なれば」が機能して成立することもある。

○アナタノ オンサランナイバ、(あなたがいらっしや
らなければ、)

○トツテ キタナレ、(取って来たら、)
これからしても、「なれば」は、類用の結果か、すでに一個の独立した機能体として、条件接続になつて立っている様子がうかがわれよう。

四

以上にとりあげた「ば」による条件法は、すべて、仮定の順接を示したものであつた。ところが、一方に、既定の逆接を示すともみなされる用法が、わずかながら存するのである。

○キンサツ ハズジャツ タイバ ナシ キンサラン ジャ
ローカ。(いらっしやるはずだったけれど何故いらっしやらないのだろうか。)

○キノ コライタレ モー モドライタ モナー。
(昨日来られたけれども帰られたよ。)

この文例で、「ノタイバ」「ノタレ」は、いずれも、いわば、「たれど」に相当する既定の逆接を示していて、注目される。

言うまでもなく、「たれば」は、もともと、順接の既定条件法に立った。その既定条件を表わすある種の「ノば」が、上代以来、時に、逆接に用いられたことは、国語史上、明らかなる事実である。その「ば」の、特殊な強調性がここにも生きて、上述のように、逆接の接続点を示していると見られ

よう。

さて、この用法の出現頻度は低く、現下では、主として老年層に見出されるに過ぎないかのようなのである。

五

否定の仮定条件を表わす「ノねば」は、「中止法」に立って、特殊な命令表現を生むことがある。

○ハヨ シエンバ。(早くおしよ。)

○ハヨ カエランバ。(早くお帰りよ。)

あるいは、

○インイデ コネ。(急いでおいでよ。)

○ハヨ シエネ。(早くおしよ。)

相手の行為にかかわる、特定の仮定条件のみを、一気に持ちかけることによつて、婉曲に、その仮定行為の実現を促した表現である。一種の命令表現としてよい。否定の条件法をとるところに、強調の心意がひそむ。

右の、「ンバ」「ネ」では、後者の「ネ」がとられやすいか。が、共にこの種の表現に慣用されて、文未詞化の傾向を見せるようにもなっている。

婉曲な表現であるだけに、品位も悪くない。ある土地人も、「ハヨ シエネ。」と「ハヨ シエロ。」とを比較して、前者を同輩に、後者を目下に用いると説明した。

六

当、北山方言では、仮定の条件を表わすのに、右の「ば」による言い方の外に、助詞「ギー」類を用いる方法がある。

○アメノ フツギー オヨガレン バイ。(雨が降れば泳がれないよ。)

○ゲタ ハクギー バチカブツ チューテ ナンタ。(下駄をはけば罰があたると言つてねえ。)

この「ギー」は、もともと、限定を表わす体言「きり」に発するものと思われ、当、方言でも、同類の、いわば副助詞としての用法に立つものも観察される。

○ユガシコギー ナカ。(これだけしかない。)

さて、右の、条件表現にあずかる「ギー」も、もともと、この副助詞の例に認められるような、提示限定、強調の表現性を持って、接続点に立ったかと思われる。特定事態の限定、強調は、やがて後件との相対的な関係の下に、仮定条件として把握され得る表現法を生んでいたのである。

先の、「ば」による表現に、いわば、より平面的、論理的な接続関係が認められるのに対して、これには、特殊な情の起状が認められる。その特殊性が好まれた故か、現下にあるのは、右の両条件法のうち、この「ギー」による表現の出現頻度の方が、全層にわたって一段と高い。

「ギー」は、用言のみでなく、自在に、体言にも接しておこなわれる。

○ウミジャ ナシ ヤマギー ヨカ ナイ。(海でなく山ならいいねえ。)

○エンソクヨイ リョギー ヨカ ナイ。(遠足より旅行ならいいねえ。)

なお、「ギー」は、「ギン」「ギント」「ギンター」「ギニャー」「ギニャート」などと、強調の心意に応じて、形が伸びてみえる。この事態は、一方から見れば、「ギー」類の活動の活潑さを物語るものと言えよう。

○サガニ イクギニャート ホニーニ ワラワルツ。(佐賀へ行けばほんとうに笑われる。)

七

以上、佐賀北山方言における、仮定の条件法について記述した。当、方言にあっては、上述のとおり、「ば」および「ギー」類による、二系列の表現が併存しているのである。

「なれば」および「たれば」「ねば」などの動きが注目される「ば」系の言い方は、総じて、古態の名残を留めた表現法と言えようか。一方の「ギー」系の言い方は、生活の特殊相の中に培われ、育ってきた表現法と言えそうである。ともかく、これらの二本の柱の上に、北山方言の仮定条件表現の生活が営まれているのである。

以上の表現法は、肥前、特に佐賀県下にあつては、諸相を示しつつも、かなり、一般的かようである。(小野志真男氏「佐賀・長崎」△方言学講座4▽参照)

なお、条件法の記述は、ひろくは、接統表現法の記述の中に包摂されるべきものである。

△付記▽

本稿に用いた資料は、文部省科研費(昭和三九・四〇年度)による総合研究「九州方言の基礎的研究」にあつての、筆者の分担調査結果に基づく。

(一九六六、六、二五)